
フォーゼマギカ

バース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォーゼマギカ

【Nコード】

N9840X

【作者名】

バース

【あらすじ】

鹿目まどかが『ワルプルギスの夜』を倒し、全ての魔女を消し去ってから3年後…天の川学園高校二年生になった暁美ほむらのクラスに、あの男が転入してきた。

「俺は如月弦太朗！！この学校の連中全員と友達になる男だ！！」

彼の発足した『仮面ライダー部』と共に、ゾディアーツ、そして『魔獣』との戦いに身を置くほむら。

そして、彼女の出した結論は…？

これは、如月弦太郎と暁美ほむら、そして仮面ライダー部と魔法少女達が繰り広げるハイスクールストーリーである。

宇宙キターーーーー！！！！！！！！！！

第0話 私の最初で最後の友達（前書き）

第0話 私の最初で最後の友達

「はい、今日はみんなに転校生を紹介しまーす！」

それが、この日クラス担任の先生が朝一番で発した言葉だった。転校生……それは一年に一回……いや、学校生活三年間の間に一回あるかないかのビッグイベント。

当然その言葉に誰しもが心躍らせ、いち早くグループに取り入れようとするはず。

ゆっくりと扉が開かれ……そこから噂の転校生が姿を見せた。

「あ……あの……私……あの……あ、暁美……ほ、ほむらと言います……。よ、よろしくお願ひします！」

三つ編みの綺麗な長い髪に、大きなメガネをかけた気弱そうな少女。暁美ほむらと名乗るその少女は少し前まで心臓の病気ですっと入院をしていた。

つい先日その病気が治り、いつでも通っていた病院に行けるよう、そこから最も近いこの学校に転校してきたのだ。

内気そうな彼女は、休み時間になってもやはり、皆とは溶け込めず、質問攻めにあっても『その……』とか『えつと……』しか言わず。

これでは皆をがっかりさせてしまう……そう思い、シュンとした時だった。

「ごめんね皆、暁美さん…休み時間は保健室でお薬飲まなきゃいけないの。」

「ふえ…?」

突然、ほむらにそう言って笑いかけてきた少女が一人。

どうやらこのクラスの保健委員らしく、『保健室の場所わかる?』と聞いてきてくれると彼女の手を取り、教室の外へと連れ出してくれた。

保健室に行きながら、その子はアハ八と笑いほむらに頭を下げる。

「ごめんね暁美さん、みんな転校生なんて珍しいからはしゃいじゃって。」

「うっん…ありがとうございます…。」

「アハ八、いいよ緊張しなくて!クラスメイトなんだから。あたし鹿目まどか!『まどか』って呼んで!あたしも暁美さんの事、『ほむらちゃん』って呼んでもいいかな?」

「えっ!?!」

驚いた。

今までこんな変な名前…呼んでくれる人なんて家族か病院の先生達ぐらいしかいなかった…。

いや、そもそも転校生という事を除いてもこんなに親しげに話しかけてくれる人なんていなかった。

「で、でも変な名前だし…あんまり、名前で呼ばれた事ないし…。」

「そんな事ないよ!あたしはかつこいい名前だなあって思うよ!」

「名前負けしてます…。」

「そうかな…?あ、だったらさ!」

「?」

「ほむらちゃんもかっこよくなっちゃえば良いんだよー!!」

本当に嬉しかった。

この言葉に、一体どれほど元気づけられたかわからない。自分はかっこよくなれない……最初はそう思った。そう、あの時までには……、

『魔女』に襲われるまでは…。

『魔女』……それは、絶望を振りまく災厄の種。

周囲に结界を張り巡らし、獲物を捕らえては殺す。

よく童話に出てくるような老婆の様な姿ではなく、人の形である事もあればモンスターの形をしている時もあるし、無機物の様な形をしている事もある。

狙われたら最後、死ぬしかない。

こんな形で死ぬなんて……絶望したほむらを救ったのは一筋の光。

「大丈夫ほむらちゃん!!」

「……鹿目さん……?」

それは、ピンク色の衣装を身に纏い、弓矢を構えるクラスメイトの姿。

その隣には廊下ですれ違った事がある様な無い様な…とりあえず上級生っぽい少女が立っており、マスケット銃両手に黄色い衣装を纏っている。

何が起きたのか理解ができないほむらの隣に、白い猫の様な生き物が寄ってきて彼女に教える。

「彼女達は『魔法少女』！魔女を狩る者達さ！」

「あ、あなたは…？」

「僕はキュウベえ！よろしくね曉美ほむら！」

「いきなり正体がばれちゃったねほむらちゃん…クラスの皆には内緒だよ？」

それが、鹿目まどかとの『最初の出会』

以降、ほむらはまどかと、まどかの魔法少女の先輩であるバマミと共に魔女との戦いを手伝う事になる。

とはいっても彼女自身は魔法少女にはならず、戦いを傍で見ているだけ。

魔法少女とは少女達の祈りをキュウベえこと『インキュベーター』に叶えてもらい、その代償として魂を『ソウルジェム』と呼ばれる宝石に宿し、魔女を倒すために戦う戦士の総称。

魔法少女達はさらに力をつけていく事が出来るのと同時に、消費した魔力を取り除く事が出来るのだ。

この穢れを放っておいたらどうなるのか……それについてはキュウベえは何も言わない。

しかしそれでもまどかもバミも気にしなかった、勿論ほむらも。

彼女達の目的はただ一つ…近いうちにやってくる最悪最強の魔女『

ワルプルギスの夜』を倒す事だけだった。
そして、とうとうその日がやってきた…。

「じゃあ、行ってくるね。」

弓を構え、まどかは背を向けほむらにそう言った。

彼女の足元には動かなくなってしまったマミの死体…『ワルプルギスの夜』やられ、ソウルジェムを砕かれたのだ。

ソウルジェムを失った魔法少女の末路は『死』のみ、しかしマミもそれは重々承知の上で、この戦いに身を投じていた。

「そんな…巴さん死んじゃったのに…！」
「だからだよ。」

壊滅する街、死した友…普通の人なら絶望するだけ絶望し、生きる気力すら無くす事態をいくつも目の当りにしながらも…まどかは笑っていた。

それはある意味諦めかもしれない、『ワルプルギスの夜』を倒せるのは自分だけだという覚悟かもしれない、ほむらだけでも守るという決意かもしれない。

まどかは笑いながら振り向くと、『ほむらちゃん』と呟いた。

「あたし、あなたと友達になれて嬉しかった。今でも自慢なの、あの時…貴方を救えた事。魔法少女になれて、本当に良かったって、そう思えるんだ…。」

「嫌……いけないで…！」

「さよなら、ほむらちゃん…。」

どうして…死んでしまつとわかつていたのに…。

この町が『ワルブルギスの夜』に壊されたとしても、誰もまどかを恨んだりしないのに…。

本当は自分の命なんてどうでも良かった、彼女が生きてくれるのならば。

どうせ消えるはずだった命、ならばせめて…まどかの力になれて死ぬ…そう出来たらどんなに良かったらう…？

だから、やり直したいと思った。

「その祈りは本当かい？」

キュウベえが問いかけてくる。

勿論だ、迷いなんか無い。

キュウベえと契約すれば魔法少女になれる、どんな祈りもソウルジェムとして輝かせる事が出来る。

ならばほむらの望む願いはただ一つ。

この願いの為に命を…いや、過去未来全ての時間軸を掛けてもいい。

その願いとは……、

「私、鹿目さんとの出会いをやり直したい……。彼女に守られる私じやなくて、彼女を守れる私になりたい！」

こうして、曉美ほむらは魔法少女の力を手に入れた。

その力とは『時間干渉』

この力により、彼女は過去の自分に今の自分を上書きする「過去に遡ることに成功。

今度は魔法少女として、まどかとマミに接触、協力した。

その強力な力ゆえに、彼女は前線では大活躍……と、言いたいが実際にはやはり守られてばかり。

しかし今度は自分も戦える……一緒に『ワルプルギスの夜』を倒せる。

そして……彼女の望み通り、彼女達はとうとう『ワルプルギスの夜』を倒す事に成功した。

成功した……はずだった。

その瞬間、まどかのソウルジェムが突然グリーンフシードへと変わり果ててしまったのだ。

これが『穢れ』を取り除かなかった結末。

最悪の魔女を倒すには、最大の力を使わなければならない。

まどかは、その為に再び犠牲になったのだ。

『魔法少女が魔女を生む』

その答えを知ってしまったほむらは再び過去へと遡り、今度こそまどかを救おうと尽力。

しかし、その次もダメ。

次も、次も次も次も。

全部失敗、どれも最終的な結末は『まどかの魔女化』

まどかから生まれた魔女はキュウベえ曰く『ワルプルギスの夜』を遥かに凌駕する存在らしい。

その力は、歴戦の魔法少女達が何人も命を散らしようやく倒した『ワルプルギスの夜』を一撃で葬りさるほど。

悩んだ末、ほむらはいくつ目かの時間で出会ったまどかの言葉を思い出す。

『キュウベえに騙される前の…バカなあたしを助けて…。』

そうだ、簡単な事だった。

『まどかが魔法少女になる前に『ワルプルギスの夜』を倒せばいい』
そうしてほむらは今までの甘い自分を捨て、非常になりきり、まどかを罵倒してまで彼女を守り続けた。

マミが命を落とし、仲間の魔法少女である美樹さやかが魔女に墮ち、それを救う為に佐倉杏子が犠牲となり……それでもほむらは戦い続けた。

単独で『ワルプルギスの夜』に挑み、圧倒的実力の差を思い知らされ、彼女のソウルジェムがグリーンフシードに墮ちかけたその時……、

「もういいんだよ、ほむらちゃん。」

まどかだった。

この時間の彼女は魔法少女ではなく、普通の中学2年生の女の子。しかしそれでも魔法少女の戦いを近くで見続けていた彼女の眼には覚悟があった。

ほむらが何度も時間を逆行し、自分を救ってくれていると知ったまどか。

そのほむらの為に、彼女はキュウベえに願った。

『全ての宇宙、過去、未来全ての時間の全ての魔女を、生まれる前に消し去りたい』

「そんな祈りが叶うとしたら、それは奇跡なんてレベルじゃない！因果律そのものにたいする反逆だ！！まどか、君は本当に神様になろうとしてるのかい！？」

「神様でも何でもいい！！だから、これまで希望を信じてきたみんなを泣かせたくない、最後まで笑顔でいてほしい…。それを邪魔するルールなんて…壊してやる、変えてやる！それが私の願い！！さあ、叶えてよ…インキュベーター！！！！」

その願いは、宇宙そのものを救う願いだった。

勿論、まどか程強力な素質を持った者ならばそれは可能…しかし、これを行う事で彼女の人生には『始まり』も『終わり』も無くなってしまうた。

それはつまり、『この宇宙からの追放』

彼女の存在は『存在』よりも上の『概念』というものに成り果ててしまい、『鹿目まどか』という『概念』を認識できるものはただ一人としていなくなってしまう。

いや、1人だけいる。

暁美ほむらだ。

まどかは消える寸前に、ほむらに言い残した。

『あなたは私の最高の友達』

その言葉と共に自身のリボンをはむらに託すと、まどかの姿は徐々に消えてきた。

彼女曰く、『皆を迎えに行く』そうだ。

これから彼女は魔女に成り果てた全ての魔法少女達を救いにいくのだろう。

『じゃあねほむらちゃん、いつか…またもう一度会えるから…。』
「嫌………いかないで…まどか…！」

そうして消えていく鹿目まどか。

『概念』という名の『神』になった彼女は、この宇宙とはまた別の空間へと……その姿を消していった。

ている。

少し離れた席に座る歌星賢吾と城島ユウキがそれについて調べているそうだが、ほむらには関係ない。

彼女の標的は『魔獣』…これが今の魔法少女達の駆除対象。

魔女とは違い、魔法少女達が墮落してなる存在ではなく、あくまで別個の存在。

まどかのおかげなのか、ソウルジェムが黒く染まっても彼女達は魔女にはならず、そのまま消滅するのみ。

この当たり前の様な風景が、鹿目まどかによってもたらされたものだとは誰も知らない、いや……『知ることができない』

これを知っているのはほむらだけ、マミにも杏子にもわかるはずが無い、もちろんキュウベえにも。

「はい、今日はみんなに転校生を紹介しまーす！」

友達はいらない、いれば、その子は魔獣の標的にされる。

だから友達を作らない……ずっとそれでいいと思ってた、そうでなければならぬと思っていた。

あの男と出会うまでは……、

「俺は如月弦太郎！！俺の夢はこの学園の連中全員と友達になる事だ！！よろしくな！！」

(……………暑苦しい男…バカみたい…。)

如月弦太朗と暁美ほむら。

仮面ライダーフォーゼと魔法少女。

ソディアーツと魔獣。

そして、スイッチとソウルジェム。

これは、如月弦太朗と暁美ほむら、そして仮面ライダー部と魔法少女達が繰り広げるハイスクールストーリーである。

第0話 私の最初で最後の友達

第0話 私の最初で最後の友達（後書き）

ショートコント・弦太朗のフォーゼマガ力に対する感想

弦太朗「宇宙キターーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

!!!!!!!!!!」

ほむら「うるさい!!冒頭から騒がない!!」

賢吾「如月、ようやく本編に出してもらえて嬉しいのはわかるがもう少し落ち着け。」

弦太朗「つしゃあ!!この小説で友達100人作るぜ!!」

ほむら「それ以前にこの小説そんなにキャラでないわよ?」

弦太朗「(OAO)」

賢吾「……………」

ほむら「さてと…さあ、行きましょう歌星君。」

賢吾「いやいや待って待って、如月どうする?」

ほむら「バカはほっとくに限るわ。」

賢吾（一話（厳密には0話）からこんな扱いでいいのか主人公!?!）

われていない倉庫のロッカーの中にアストロスイッチを使って生まれた空間を通り、月面に聳え立つこの場所にやってきている。それとこの場所の所有者（？）であるはずの賢吾は『仮面ライダー部』を認めていない。だがいくら否定しても弦太朗が引く訳が無いので、最近ではあまりそういう事を言わない。彼らは今まさに、その仮面ライダー部の部室に行こうとしているところなのだ。教室を出ようとすると弦太朗がある事に気付く。

「あれ？」

「どうした如月？」

「なあ、あいつって…？」

「あいつ？…ああ、暁美か。」

弦太朗が指差したのは同じクラスの少女、暁美ほむら。

彼女はいつも1人で本ばかり読んでおり、誰かと口を聞いているところなど見た事が無い。

放課後になっても教室で1人本を読んでいるほむら……『この学園の連中全員と友達になる事』を目指す弦太朗にとって、それはゆゆしき問題だった。

友達の友達は皆友達……それなのにクラスに孤立している存在がいる……と、なればするべき行動はただ一つ。

「賢吾！！！！先に行っててくれ！！！！」

「は？いや…お前何するつもりだ？」

「決まってるんだろ！！あの暁美って奴と友達になつてくる！！」

「いやいやいやいや待って待って待って待って！？放課後は新しいスイッチの試験をすると言っただろう！そんなの明日の朝にやれ！！」

「いゝやダメだ！！俺はこの学園の連中全員と一刻も早く友達にならねえといけねえんだよ！！」

「何故だ！？」

「俺だからだ！！」

「いや意味わからない！！」

相変わらず弦太朗は時々わけのわからない事を言う…。

それに今まで付き合ってきたユウキの屈強さが痛いほどわかる、そんな歌星賢吾高校2年生の秋である。

ここで彼と揉めても全く得しないので、仕方なく賢吾は先にラビッツトハッチへと向かつて行つた。

賢吾が去つていくと、弦太朗は短すぎる学ランを羽織り直し、微妙なりーゼントを整えながらほむらの下へ。

ほむらが読んでいた本を覗き込みながら、彼は彼女に笑顔で話しかけた。

「何読んでんだ？」

「貴方には関係の無い物よ。」

「……………」

即答だった。

あまりにも即答すぎて何も言い返せない…弦太朗は実はかなりの口下手だったりする。

しかしそれでも彼は負けない……『友達マイスター（今命名）』の誇りに掛けて……！！

「それ面白いか？」

「ええ、貴方と話しているよりずっと。」

「どついう本なんだ？」

「貴方とは一生無縁の本よ。」

「分厚いな？読むの辛くね？」

「私にとって貴方と話す方が辛いわ。」

「もしかして俺の事嫌い？」

「そうね、どちらかと言えば。」

今までに無い程の攻防戦……これはゾディアーツとの戦闘並みにスリルがある。

それでも弦太朗は負けない……否、負けたくない。

ここで負けては漢がすたる、以前に大文字や美羽に言われ通り、ただの『トラッシュ』だ。

だからこそ彼は立ち上がり、いつもの様に胸お何度か叩きほむらに手を向けた。

「俺は如月弦太朗！！この学園の連中全員と友達になる男だ！！暁美、お前ともぜってえ友達になってやるからな！！」

ガタっ！！

弦太朗がそう言った瞬間、急にほむらが立ち上がった。

何事かと思いい彼女の顔を見る弦太朗……その表情を見て、弦太朗はハッとしてしまった。

泣いている。

わんわん泣く…というか、涙だけを流しているという感じ。

彼女は弦太朗の胸蔵を掴むと、信じられないほど強い力で彼を教室の外へと放り投げた。

そして壁に叩きつけ、怒りの形相で彼に向かって呟く。

「二度と…、」

「え……え……？」

「二度と私に向かって……『友達』なんて言葉口にしないで……！！」

それだけ言うと、ほむらは荷物を纏めて逃げるように帰って行った。一体自分が何をしたのだろう……弦太朗はこの時、彼女の心の核心に触れてしまった事に全く気付かず、腑に落ちないまま彼も仮面ライダー部の部室へと向かって行った。

学園から500m程離れたマンションのとある一室

そこは天の川学園高校3年生である、巴マミの自宅だった。

彼女は4年ほど前に両親を事故で無くし、遠い親戚しかおらず身寄りもない。

だから中学生の時からここで1人暮らしを始め、アルバイトをしながらから学校生活をそれなりに満喫している。

1年生の時から仲が良かった風城美羽は最近、チア部以外の謎の部活に入り鑿になっていく為放課後はほとんど会っていない。だから最近では自宅に直帰で、アルバイトがある日以外はここで勉強している。

主に3人で。

「お邪魔するわ。」

「あらほむらさん、いらつしやい。」

「よう、ほむら！今日は早いな？」

一緒にいるのは同じ学年で別クラスの佐倉杏子。

一応マミから勉強を教えてもらうという口実で来ているのだが…来たらだいたい食つか寝るかしかしておらず、教科書なんか開いた試しが無い。

それでも学年末は基本的には10位以内に入るので、勉強は相当できる方だ。

「杏子、あなた勉強しないんなら帰ったらどうなの？」

「帰るつつつてもあたしん家、この部屋の隣だもん。」

「杏子さん、実はここ最近毎日夜遅くまでいるのよ……おかげで夕飯作るのが楽しくてしょうがないわ。」

「マミさん、そいつに付き合っているとそのうち『太り』ますよ？」

「杏子さん、今すぐ帰ってくれるかしら？」

「ほむらてめえ……！」

クスクスと笑いながら、自分も鞆を置いてマミと杏子の隣に座るほむら。

ここ3年間、毎日のように繰り返している日常だ。

はたから見れば彼女らはきつと『友達』に見えるのだろう。

だが、実際には違う。

彼女達は『同志』なのだ。

同じ秘密を共有し、同じ悩みを持ち、同じ目的の為に生きる『同志』。
だからこそほむらも彼女達と一緒にいられる。
彼女の友達あくまでも1人だけ……。

『鹿目まどか』

それは誰も知らない、暁美ほむらだけの最初で最後の友達。
彼女の事を想うと、今でも胸が痛くなる。
だからこそ、ほむらは友達なんか作らない。
友達なんか作っても……結局最後には悲しい別れが待っているのだ
から……。

仮面ライダー部

「それは君が悪い。」

「ええ〜？何でだよ隼〜？」

部室に着くなり先ほどのほむらとのやり取りの事を他の部員に相談
してみた弦太郎。

それを聞くなり我らが大文字先輩が立ち上がり、弦太郎を叱り始め
た。

何気に真面目に怒っている時の大文字は中々圧巻で、弦太朗も肩を小さくせざるを得ない。

「君はレディに対して無粋すぎるんだ。いいか？レディというのは…例えるならばそう！…まるでソフトクリームの様に柔らかく繊細で、それでいて儂い…。君の『友達になりたい』という気持ちもいいが、ここはレディファースト、女性に対してはソフトで……そしてあま〜、」

「はいはいわかりましたわかりましたからそろそろアンタはすっこんでなさい隼。」

「なっ、み、美羽…まだ僕は言いたい事の5%も言い切っては…、」
「アンタ話すと長いんだからいいの。弦太朗にはスイッチの試験があるんだからそんなに長く話なんかしてられないでしょ？」
正論で何も言い返せないキング（笑）

しかしながら大文字の言葉で弦太朗も多少は反省したのか、かなり落ち込んでいる。

そんな彼を元気づけようと後輩のJKと友子がそれぞれエロ本となにやら意味不明な十字架（どこかのEXAのマークっぽい物）を差し出しているが、そこは美羽に止められた。

「でもさ弦ちゃん、あの暁美さんって…結構変な噂立ってるよ？」
「噂？」

そう言ってきたのは幼馴染であるユウキ。

彼女も友達から聞いた話だけど、と少し濁しながら、暁美ほむらという生徒について語り始めた。

「何でもあの子、夜な夜なこの辺を変なコスプレして出歩いているんだって！それで白い猫みたなの引き連れて…それでいきなり、『魔獣の気配がする…ッ！』…とか言い出しちゃうんだって！その直後に姿が消えたり、宙に浮かんだり……あーもう！言ってるこっちが怖くなってきたちゃったよー！」

「ま……マママママジか……！？そそそりや、そりやりや、ヤベエなあ……。」

「その話……もっと詳しく聞きたい……かも……。」

「え？うぎゃー……！！！！！」

ビビっているユウキに追い打ちをかける（おもに上から）友子。

ただでさえオカルト&ユウキ好きな彼女……おそらくユウキは当然開放してもらえないだろう。

情報通のJkも知らない情報なので、彼も是非とも話が聞きたいとユウキにすがった。

その様子を今まで見ていた賢吾……彼ははあ、とため息をつくと席を立ち、いまだにガタガタ震えている弦太郎の肩をポンツと叩いた。

「彼女が気になるのか如月？」

「あ？……ああ、まあ……。『友達』って言った時のあいつの顔……なんかすっげえ寂しそうだった……。」

「………ってこい……。」

「え？」

「行って来い、如月。」

「行って来いって……え？賢吾？」

「君がそんな調子じゃ、スイッチの試験もつまぐいくはずが無い。

今回検証する予定だったこの『マグネットスイッチ』はまだ何もか

もが不明な謎のスイッチなんだ。そんな危険な物を、精神不安定なお前に渡してフォーゼドライバーを壊されちゃ堪らないからな。さつさと曉美に謝るか何かして、早く戻って来い。」

「賢吾……うおおおおお！……！やっぱりお前俺の親友だあああああ……！！！」

「なっ！？だ、だから……！俺は君とは親友になった覚えは無いし、そもそもまだ友達になったとも言っていない……！」

「照れるな照れるな　っしやあ……！じゃあちよっくら行ってくるぜ……！！！」

早速荷物を纏め、部屋を出ていく弦太朗。

そう言えば、さっきほむらが教室に読んでいた本を忘れてたなと思いだし、弦太朗は一度教室へと向かっていた。

「……！！……マミさん、杏子……！！！」

「ああ、わかってる。」

「『魔獣』の気配ね。」

マミの部屋で勉強をするどころか何故かチーズケーキを食べていた3人は同時に同じ気配に気づくと、全員で部屋を出た。

『魔獣』……それは、彼女達が戦うべき敵。

古来より存在する厄災の種であり、同時に彼女達『魔法少女』が戦うべき敵。

奴らは人に隠れて生き、人々の魂を喰らい続ける。

そうなる前に倒す……！それこそが魔法少女の目的だ。

『皆、用意はいいかい？』

「あら淫獣、いたの？」

『相変わらず君は口が悪いねほむら。』

巴家の玄関先でスタンバっていた白い猫の様な生物。

それこそが魔法少女の生みの親とも言える存在、『キュウベえ』

真の名を『インキュベーター』ともいい、簡単に言えば『宇宙人』だ。

魔法少女は全て彼と契約してから生まれる、彼曰く自分がいなければ人類はとつくに滅亡しているか未だに洞穴暮らしで野生の動物を狩って生きていただろうとの事。

可愛い外見とは裏腹に信用できない胡散臭い奴だが、それでも彼女達とは3年間ずっと一緒に戦い続けてきた仲だ。

キュウベえと共に3人は『魔獣』の気配がする場所……『天の川学園高校2年B組の教室』へと向かった。

「何だ……こりゃ……？」

教室に入るや否や、弦太郎は信じられないものを目撃した。

何故か机や椅子が宙に浮いており、更に教室の中に階段があったり、今彼が入ってきたはずの入り口が無くなってたりしている……。しかも極めつけがコレ。

『オ……オオオオオ……ッ……！』

『ウオ……ウエエエエエイ……ガラミゾ……！！』

『ウゴオ…ゴデ…グツデモイイガナ……？』

白いマントに身を包んだ身長5m近い男達。

常識で考えて普通の高校の教室の大きさに収まる様なサイズではなく…しかもどこどころから一匹ずつ『生えてきてる』

気持ち悪いにも程がある……どうなってるんだろっこれは…？

「何だこいつら…？スイッチの化けもんでもねえ!？」

『ウゴオ……ザ、ザヨゴオオオオオオオ……!!!』

「うわっ!？」

何と、一匹が舌を伸ばし、弦太朗を攻撃してきた。

彼はそれを何とかかわすが、次から次へと怪物たちは襲ってくる。

何がなんだかさっぱりわからない……彼が鞆の中に手を突っ込んだ

その時だった……、

「テイロ・ファイナーレ!!」

ドカンッ！！！！

「ウオオオオオオオン……！！」

「オデノカダダダボドボドダァー……！！」

何と、いきなり弦太郎の後ろから巨大な大砲が放たれ、怪物を数匹纏めて消し去った。

彼が思わず振り返ると、そこには3人の変な格好の少女が。

1人はイギリスとフランスの洋服を足して割ったような恰好にベレ帽を被ったマスケット銃の少女。

もう1人は赤い騎士の様な服に長いランスを持った少女。

そしてもう一人は……、

「あ、暁美……？」

「！？……き、如月君……？」

何と、暁美ほむら。

先ほどまでの制服とは違い、黒い服に小さい丸い盾を装備していた。赤い服の少女がほむらの肩を叩いて聞いてくる。

「何だお前？知り合いか？」

「え……ええ、一応、クラスメイト……。」

「あらそうなの？なら、しっかり守ってあげないといけないわね」
「そう言うと2人の少女……マミと杏子は弦太郎の前に立った。」

迫りくる怪物……『魔獣』を薙ぎ払っていく2人。

ほむらも弦太郎に早く逃げるように促しながら、彼女の武器である弓矢を構える。

だが……、

「……女にばっか……守られるわけにもいかねえよな……。」

「何を言ってるの！？早く逃げなさい！！……って、それは……！？」
魔獣からの攻撃を盾で防いでいたほむらが気付いたもの……それは弦
太朗の腰のベルト。

大きいバックルに4つのスイッチが嵌め込まれており、彼はほむらの
前に立ちながらベルトのスイッチを右から順に一つずつ入れてい
く。

「き、如月君……貴方なにを……！？」

「何だがよくわかんねえけど……こいつら片づければいいんだな！
！」

『3……、』

スイッチを全部入れると、続いてベルトからカウントが始まった。
徐々に手を胸の辺りに近づきながら、弦太朗はベルトについている
レバーを握る。

『2……、』

「おう曉美、危ないからちよつと下がってる！」

「何を言ってるの!? 危なくて下がるのはあなたの……!?」

『1…、』

「変身ッッ!!!」

その叫びと共に弦太郎は勢いよくレバーを入れ、腕を天に突き上げた。

すると彼の体を白い光が包み込み…どうじにロケットの発射の時の様な激しい噴射が辺りに巻き起こる。

それに耐えきれずに吹っ飛ばされるほむら…その次に彼女が見たものは…、

「あ……あれは……!?」

「宇宙…キターーーーーッ!!!!!!!!!!!!!!」

ロケットの様な頭部に宇宙飛行士の様なボディ。

『仮面ライダーフォーゼ』が、魔法少女と魔獣に初めて邂逅した瞬間だった。

第1話 宇宙キター——!!!

第1話 宇宙キターーーーー！！！！！！（後書き）

ショートコント：巴家の食糧事情

1日目

マミ「今日の夕飯、何にしようかしら…？」

杏子「あたし鍋食いたい！」

マミ「お鍋ねえ…いいかもしれないわね。そうだ、ほむらさんも呼びましょー！」

2日目

マミ「さてと、それじゃお夕飯の買い物して行くかしら？」

杏子「今日はあっさりしたもの食いたいな…そうだ、パスタなんてどうだ？ボンゴレパスタ！」

マミ「あらいいわね！」

3日目

杏子「今日はおでんにしようぜ！」

マミ「いいわねえおでん！」

4日目

杏子「カレー食いたいなー…。」

マミ「はいはいカレーね。」

5日目

マミ「今日は焼き魚にしようかしら？」

杏子「た・い！た・い！た・い！！」

マミ「鯛かあ…ならお刺身の方がいいかも？」

6日目

杏子「このトンカツうまー！！！！！！」

マミ「ふふふ、よかったわお口にあって。」

7日目

ほむら「杏子、あなた勉強しないんなら帰ったらどうなの？」

杏子「帰るつつつてもあたしん家、この部屋の隣だもん。」

マミ「杏子さん、実はここ最近毎日夜遅くまでいるのよ……おかげで夕飯作るのが楽しくてしょうがないわ。」

ほむら「マミさん、そいつに付き合っているとそのうち『太り』ますよっ。」

マミ「杏子さん、今すぐ帰ってくれるかしら？」

杏子「ほむらてめえ！！」

第2話 わけがわからないよ

「何……これ……？」

ほむらは一瞬、自分の目の前で起きた事が信じられなかった。

自分は確か、魔獣の気配を感じとり…魔法少女に変身して仲間と共に駆けつけた。

そこで魔獣に襲われていたのはクラスメイトの如月弦太郎で…彼女は彼を守らなくてはならなかった。

それがどうした事か？

何と弦太郎はほむら達が見た事も無い機械を腰に巻きつけ、なんと『変身』をしたのだ。

ロケットの様な頭部に、宇宙飛行士の様なボディを持った戦士に…、
そう…、

「宇宙…キターーーーーーッ!!!!!!!!!!」

『仮面ライダーフォーゼ』に。

「き、如月…君…？」

「っしやあ!!下がってな暁美、ちょっと危ねえぞ！」

フォーゼはそう言うと、3人の魔法処女を押しつけ、5体の魔獣の前に立った。

敵目掛けて右手を突き出すと、彼は仮面の下でドヤ顔に成りながら叫ぶ。

「仮面ライダーフォーゼ!!! タイマン張らしてもらっぜ!!!」

「……はっ!?!」

その言葉に同時に素っ頓狂な声を上げたほむら、マミ、杏子。
タイムン…それは簡単に言つと1対1。

だが敵は5体…どう見てもタイムンとは言えない。

もしかしてこの男…1人で戦うつもりなのだろうか?

『オ…オ…?ケンジャキ…!?!』

『ゾノバズルノビーズハ…オデガノミゴンダアアアア!!!』

相変わらずわけのわからない言葉を叫びながら襲い掛かってくる魔
獣。

長い腕を伸ばし、フォーゼを掴もうとする。

だがフォーゼはフンツと鼻で笑うと、ベルト『フォーゼドライバー』
の一番右端のスイッチを押し、右腕を前へと突き出した。

『ロ・ケ・ツ・トノオン』

電子音声が鳴るとフォーゼの右腕にオレンジ色の武装が装着される。
その名も『ロケットモジュール』…フォーゼ専用のブースターユニ
ット。

ロケットモジュールの尾から白い煙がまき散らされ、フォーゼは前
へ突進、魔獣の攻撃を避けた。

そのまま一旦停止し、魔獣の顎目掛けて再びアタック。

「おりゃああああ!!!」

『ポドポドッ!?!』

ガコンツ！と、良い音が鳴り倒れる魔獣。
空中に飛んでいくフォーゼはそこである事に気付いた。

「あれ？…ここ、天井無い？」

いつもならこのまま天井突き破っていくフォーゼだが、今回は何故かいつまでたつても天井にぶつかからない。

この怪物達を作ったと思われる変な空間のせいだろうか？
しかしフォーゼは基本的に馬鹿なので細かい事など考えず、次のモジュールを発動。

『ラン・チ・ヤ・ーノオン レ・ー・ダ・ーノオン』

今度は右脚に『ランチャーモジュール』が、左腕に『リーダーモジュール』が出現。

ロケットモジュールをオフにして一旦着地すると、リーダーで魔獣をセツト。

右脚を前に突出し…フォーゼは魔獣目掛けてカ一杯ランチャーを放った。

『ゴノツ！？』

『ギヨリダラ！！』

『バリアババレナイナツ！！？？』

「てめえら！！ちょっとはまともな言葉しゃべれ！！！」

「凄い…。」

フォーゼの戦いに圧巻されるほむら。

彼女だけではない、この場にいるベテラン魔法少女全員がフォーゼの戦いに見とれていた。

魔法を一切使わない多彩なモジュール攻撃…喧嘩腰な態度…そして

慌てて魔法処女3人は元の制服姿に変身を解き、フォーゼもドライブのスイッチをオフにして変身解除。

弦太郎の姿に戻ると同時に教室のドアからひよこつと地学担当の生活指導：大杉が顔を見せ、彼は憎々しげに弦太郎を睨みながら言い放った。

「おい如月い…？お前こんな時間まで教室で何してんだ！」

「あ、いやあ…これはその…。」

「ん？おお！誰かと思えば3年生の『クイーン』候補、バママ君ではありませんかあゝ！私、実は君の事、いつかはクイーンを狙えると思ってるんですよえゝ、頑張ってね！」

「あ、はい…ありがとうございます…。」

何故か大杉は彼女が1学年下の教室にいる事は問わずに、彼女と握手してそのままどこかへ行ってしまった。

ここで話すと人目に付く…そう考えたほむらは…、

「仕方ないわね…ママさんの家に行きましょう、近いし、邪魔も入らないわ。」

それに同意し、3人は半ば弦太郎を連行する形で学園から姿を消していった…。

「それじゃ…説明してもらおうかしら？」

「その前にこの縄を解いてもらおうかしら？」

巴家へと連行された弦太郎は、逃げない様にと（ほむらの提案によ

り) マミの魔法でしっかりと椅子に固定されていた。

人間の力じゃまずちぎれないであろう魔法の網…何とかちぎろうと頑張るが無理っぽい。

何とかほむらに交渉してみるが、どうやら彼女は説明されるまで帰す気は全く無いらしい。

しかし縛っている本人のマミはさすがに可愛そうだと思ったのか…ほむらに少しゆるめるぐらいならいいわよね?と交渉。

3分の議論の末にほむらが折れ、弦太朗は一応、手をまともに動かせるぐらいには縄を緩めてもらえた。

「で、何かしらさっきの…えっと…」

「イカ!」

「そう、そのイカ…って、杏子、アナタちよっと黙ってなさい…。」

「

「何だよ…イカっぽいじゃん!」

「おう!俺もイカ好きだぜ!」

バンツ!!!!

「……………」

「もうしわけありませんでした。」

弦太朗と杏子に切れたほむらが学校指定のカバンに何故が入っていた拳銃をぶっ放した。

それにガチガチと震える2人…マミが『orz』とやっているのは気にしない方向でOK。

「で、なんだったかしら?」

「あれはフォーゼ!『仮面ライダーフォーゼ』だ!」

「それそれで、何?あのフォーゼって?魔獣達に苦戦もせずにつてたけど…?」

ほむらがそう聞くと、弦太朗は『うーん』と唸りだし、ぼりぼりと頭を掻き始めた。
そうなるもの無理はない…何せ弦太朗、フォーゼの事実は何も知らないのだ。

『スイッチ使って怪物と戦うヒーロー』

ぐらいにしか…。

「俺もあんま詳しくねえんだけど…コレ。」

ごそごそと鞆を漁り、ゴツイ機械を机の上に取り出す弦太朗。

これが先ほどの変身に使用したベルト『フォーゼドライバー』だ。

そこには4つの形の違うスイッチが嵌め込まれており、彼はそこから良く使うスイッチの一つ…『ロケットスイッチ』を引き抜くとそれを彼女らに見せた。

「何よコレ？」

「『スイッチ』だ！俺も良くしらねえけど、コイツがあると…何と
いうか…宇宙が来るんだぜ！！！」

「…はあ…？」

さっぱり意味不明だった。

一応彼と同じクラスであるほむらに杏子とママが『彼ってどういう人？』と聞くと、彼女は『多分…ただのバカ…』と答える。

間違っていない、全くもってその通りだ。

同じクラスであるほむらの言葉や、先ほどからの言動とこのまっすぐな瞳…彼が隠し事をしそうな人間にはどうしても見えない。

多分、フォーゼも良く知らないで使ってるのだろう。

「この『フォーゼ』って何処で手に入れたんだ？」

「借りてるんだ！賢吾からな！」

「賢吾って…歌星君？確かにあなた達よくつるんでるけど…何？彼もそれに関係あるの？」

「おう！何せ俺達や『仮面ライダー部』だからな！！！」

「『仮面ライダー部』？」

聞いた事はある。

確か…都市伝説として語り継がれている『仮面ライダー』の名に肖った部活だ。

前は嫌味全開だったキングこと大文字隼や、プライドの塊の風城美羽、それに他人を平気で利用すると評判の悪かったJKも所属している部活で、何でも入部直後には以前とはまるで別人のように更生するとか何とか…。

マミも同じクラスで結構仲のいい美羽から話をちよろつとだけ聞いた事ある。

「この学校を怪物から守る部活だ！！楽しいぜ！！」

「ああ…そう、良かったわね…。」

もはや聞く気力すら失せる。

ほむらは久々に他人に対し、心の底からため息をついた。まさか事情を聞き出すだけでここまで疲れるとは…。

「んじゃ、今度は俺が聞くけど…さっきの連中なんだ？『ザヨコ』とか言ってた奴ら。」

「ああ…あれは…『魔獣』よ。」

「饅頭？美味そうだな。」

「あなたの頭の中でなら美味しい温泉饅頭が作れそうね。」

「いやあ、それほども無いぜ」

「……………」

皮肉を言っているのがわからないのだろうか？

馬鹿なのか純粹なのか…多分前者だろう…。

「奴ら『魔獣』は人間の『憎しみ』という概念から生まれた怪物よ。誰が生んだ…とか明確な正体はわからない。突然異空間を作って現れて人を襲い、そして忽然と姿を消す…そういう連中よ。」

「アイツらが落としたコレ…なんだ？」

弦太朗がほむらに突き出したのは先ほどの魔獣が落とした黒いキューブの様な物。

大きさは消しゴム一個分ぐらいと小さく、パツと見黒糖に見えなくも無い。

ほむらは弦太朗が差し出したそれを受け取ると、自分のソウルジェムにかざし…黒いキューブはみるみる内に白く変色して行った。

「これがこの『グリーンフキューブ』の使い方よ。私達『魔法少女』の持つソウルジェムにかざす事で穢れを取り除き、魔力を回復する事が出来るの。」

「ま、魔法少女…？なんだそりゃ…？」

『それは僕から説明するよ！』

突然弦太朗の後ろから声が聞こえ、彼はとっさに振り返った。

そこには白い猫の様な生き物が窓の上にぼつりと座っており、魔法少女3人がこの猫の事を『キュウベえ』と呼ぶと、キュウベえはテーブルの上に乗リパタパタと尻尾を振るう。

『魔法少女と言うのは、僕達『インキュベーター』と契約した少女達の事さ！僕が願いを叶える代わりに彼女達に『魔法少女』という戦士になつてもらい、魔獣達と戦つた時に生じるエネルギーでエントロピーを増大させて宇宙崩壊を防ぐ為n、』

「猫が喋つたら頭良く見えると思つてんじゃねえぞ！！！！！！」

『……………ほむら、なんだい彼は？折角僕が僕の事見えるようにしてあげたのに…。』

「大丈夫、彼はただの『馬鹿』よ。」

『わけがわからないよ。』

もはや人の話を一切聞かない弦太朗。

すると彼はいきなり立ち上がり『あつ！！賢吾達との約束忘れてた…！！』と頭を抱えて唸りだし、そのまま縄を引きちぎって鞆を手にとると玄関まで向かう。

「ちよつと如月君何処へ行くの!？」

「わりの曉美…賢吾達との約束すっかり忘れてたんだ……………そんなじゃな！」

「あ、ま、待ちなさい!!」
手を振ると、弦太郎は走って部屋を飛び出し、再び学校へと向かって行った。

その途中で彼はある事を思い出し、エレベーターに乗る前に急いで再びマミの部屋に向かうと、ほむらを呼びつけた。

「暁美!!」

「な……何よ……?」

「お前にも、こんな良い友達がいたんだな!!なんかちょっと安心したぜ!また明日な!!」

「あ、待ちなさい如月君!!きさ……もつ……。」

それだけ言う為になんか引き返してきたのだろうか?

『友達』……その言葉に、ほむらは一瞬心が揺らいだ。

振り返ったそこには、3年前からの『同志』である杏子とマミ……それとキュウベえ。

もしかしたら彼女達は世間一般的にみると……友達、なのでは無いだろうか……?

そんな事を考えた、ほむらはハッとするとフルフルと頭を振り、そ

んな考えを振り切った。

(そうよ…私の友達はまどかだけ……友達は……)。

第2話 わけがわからないよ

第2話 わけがわからないよ（後書き）

ショートコント：キユウベエの日常

キユウベエ『やあ！僕はキユウベエ！どこにでもいる普通のインキユバーダーさ！僕は普段、散歩がてらいい魔法少女候補がいなかったらどうか調査をしているんだ！今日はそんな僕の日常を紹介するよ！』

タマ「にやー！」

キユウベエ『おや？君は3丁目の梅村さんとこの末っ子タマちゃんじゃないか？どうしたんだい？』

タマ「にやー！」 口にくわえた魚キユウベエに差し出しながら

キユウベエ『これは？』

タマ「にやー！」

キユウベエ『くれるのかい？…ごめんね、僕は味覚を感じないから食べても意味が無いんだ。これは君の獲物だから君が食べなよ。』

タマ「にやー！」

キユウベエ『いつも遊んでくれてるお礼だつて？まるで僕が猫みたいじゃないか……仕方ない、そこまで言うならもらつよ。』

タマ「にやー！ー！」

キユウベエ『どういたしまして。』

大杉「あー…園田先生は俺の事『好き』……『嫌い』…『好き』…『嫌い』…。」

キユウベエ『あの人はあんなところで花を塗って何をしてるんだろ

う？わけがわからないよ。』

大杉「きら…！？うがああああああ！…！！…！！…！！これ全部如月のせいだあああああ！…！！…！！…」

キユウベえ『本当にわけわかんねー…。』

キユウベえ『ただいま。』

ほむら「あらおかえり。今日は何してたの？」

キユウベえ『君の学校でわけのわからないものを見たよ。それと梅

村さん家のタマから魚をもらった。』

ほむら「何それ？」

第3話 友達を作らない(前書き)

今回は短めでクオリティも低めです。

第3話 友達を作らない

仮面ライダーフォーゼとの出会いから半日が過ぎ…朝の7時。

ほむらはいつもの様に目覚ましの音で目をさまし、まだまだ眠たい目を擦りながらベットから起き上がった。

頭をポリポリと掻きながら、自分のベットの隣に置いてあるバスケット籠の中を覗く。

そこには白くてモフモフした物体が体を丸めて眠っており、彼女は籠を掴むとそれを盛大にひっくり返した。

どさりという音が鳴り、籠の中から落ちる猫っぽい変な物体。

それはモゾモゾと動くと、ふぁ〜という小さな欠伸をしてほむらに言った。

「おはよう、ほむら！」

「起きるの遅いわよキュウベえ……さつさと支度するわよ。」

「了解だよ。」

もう一度2人して欠伸をすると、まずほむらは洗面所で歯磨き。

それから簡単に朝食を済ませると、天ノ川学園高校の制服に着替え、机の上に置いてある自分のソウルジェムを手を取った。

それを首からぶら下げて、彼女は宝箱の中にしまっただけの一本のリップンを取り出す。

「おはよう……まどか……。」

それは彼女の最初で最後の友達だった鹿目まどかの物だったリップン。彼女が『円環の理』として消える直前、ほむらに託した…『まどかが存在したという唯一の証』

このリボンはほむらにとって自分の命よりも大切な物であり、何があるとも絶対に守らなければならぬ宝物。
しかしこれを隠しておくような事はせず、黒い髪には目立ちすぎる色合いのそのリボンを巻くと、ほむらはキユウベえを肩に乗せ、学校へと向かった。

「よう賢吾！おはようさん！」

「如月……お前、結局あの後帰ってこなかったな……？」

「あ……あー……わりい……ちょーつと変な連中に絡まれてさ、そいつら倒してから来たら……もう皆帰っちゃまって……。」

「もう！だったら連絡ぐらくれればいいのに！」

「わりいユウキ！賢吾！今日帰りにラーメン奢るから！なっ！？」
いつもの様に登校してきた弦太郎は、昨日の事などまるで忘れたかのように普段通りの振る舞いを見せ、さも当然の様に賢吾達と話し始めた。

別のクラスである佐倉杏子は弦太郎が昨日の事を他の連中に喋らないかどうか、窓から観察中。

特にまだ言いふらすような感じはしない……。
アンパンをかじりながらジーツと弦太郎を睨みつけていると……、

「おはよ。」

「どひゃあああああ……！！……？……？」

突然後ろから肩を掴まれ、杏子はこの世のものとは思えない程の絶

叫を上げた。

それにはさすがにクラス全員が気付き、一斉に杏子へと振り返る。その杏子自身も振り返ってみると、そこにはクラス全員と同じようにビックリ仰天という顔をしたほむらとキュウベエの姿が。

「なんだよお前かよ!? 脅かすなよ!!!」

「脅かすなつて……私は普通に挨拶したただけでしょ? それよりそっ、立つてられると邪魔で教室入れないんだけど?」

『何を見ていたんだい杏子?』

「あ? いや……あの如月つて奴が周りの連中にあたしらの事喋らねえか……。」

どうやら杏子は弦太朗が魔法少女の事を周りに言いふらして、自分達を笑いものにするんじゃないかと疑っていたようだ。

確かにそんな事されたら困るが、特別ほむらは心配していない様子。弦太朗を信頼している……とかじゃ無く、彼が仮にも魔法少女の事を周りに言いふらしても、『仮面ライダー部』に所属して友達友達言いまくっている一直線馬鹿の厨二的発言など、誰も相手にするはずが無い。

そのライダー部の奴らならわからないが……とにかく、彼のせいで自分達の事がばれる事は無いだろうというのがほむらの考え。そう言つて杏子を追い払うと、ほむらは自分の席へ。

それに気づいた弦太朗はにやりと笑い、彼女の席まで行くとほむらの席をダンっ!!と叩いた。

「よう! おはよう暁美!!!」

「……………ええ、おはよう。」

「何だよ元気ねえな? 友達……佐倉と巴先輩だったか? 一緒に来てないのか? 佐倉つてもしかして別のクラス?」

「あなたには関係無いでしょう……さつさと城島さん達のところへ戻りなさい。」

「おう! じゃあな!」

それだけの挨拶をかわして再びユウキ達のところへ行く弦太朗。

彼の姿を見ながら、彼女は昨夜の事を思い出した。
別れ際の彼が言った一言……、

『お前にも、こんな良い友達がいたんだな!!なんかちょっと安心
したぜ!』

あの言葉が妙に頭に張り付いて離れない……。

忘れようと何度も頑張ったが、やはり忘れられない……。

『友達』……違う、杏子やマミやキユウベえはそんなのじゃない。

彼女達はただ……目的を同じとするだけの『同志』に過ぎない……。

そんな中、彼女の携帯がブルブルと鳴った。

開いてみると、マミからメールが届いており、内容は『今日の夕飯

ご一緒しない?』だった。

たかが同志でこんな言葉を贈るだろうか……?

これは……、

(ねえほむらちゃん!今日のお昼一緒に食べない?)

「違う……。」

まどかのそんな言葉を思い出した。

いつでも自分に優しく接してくれ、勇気づけてくれた大事な大事な
最愛で最初で最後の友達。

彼女の言葉には本当にいつも助けられた……だったら、マミ達はど
うだろうか?

(昨日からなんか調子狂うわ……これも全部アイツのせいよ……………。)

(そうかな？僕には君が嬉しそうに見えるけど？)

(なっ！？きゅ、キユウベえアంత勝手に人の頭の中覗くのやめなさいっていつも言ってるでしょ！！だいたいインキュベーターのアంతが人の感情なんかわかるわけないでしょ！？)

(確かにそうだけどさ…………でも君の頭の中、いつもその『まどか』って子の事考えてる時とおんなじくらいのエントロピー出てるから。ま、僕に得のある話じゃ無いから興味は無いけど。)

頭の中でそう言うと、キユウベえはほむらの肩から降りて教室を出て行った。

普通の人の目には見えないからいいものの(動物には見えるらしい)…………あんな宇宙外生命体が校内をうろつき回っていると考えると少し気分が悪い。

キユウベえの姿が見えなくなるとほむらは拳を握り…………唇を噛みしめた。

(友達なんて…………作らない…………！)

昼休み、賢吾やユウキ達は仮面ライダー部の部室…ラビットハッチで昼食を摂る事になり、当然弦太郎もそれには参加する予定。

しかし、彼には肝心の弁当が無い。

その為に購買へ向かう彼は…………、

「昼メシキターーーーー！！！！！！！！」

まさにロケットの如く……校内を走っていた。

一日5食限定の『天高特製エビフライ弁当』…これにありつく為に、
日夜生徒間での争いが絶えない。

ロケットモジュール着けてんじゃないかってぐらいのスピードで急いで購買がある学食へ行き…財布から小銭を取り出して握りしめると、それを購買のおばちゃんの前に叩きつけた。

しかし結果は…、

「ごめんねえ…ついさっき売切れちゃったんだよ。」

「昼メシこねえええええええええええええええええ！！！！！！！！」

惨敗。

仕様が無く、パンを適当に3つほど買い、弦太朗はトボトボと仮面ライダー部へ向かう。

その途中だった。

「あれ？曉美？」

「……………」

「何か最近よく会うよな、お前もメシか？」

「……………見ればわかるでしょ？」

丁度図書室の廊下で、弁当の袋をぶら下げているほむらと出くわした。

どうやら昼休みにここでママや杏子（ついでにキュウベえ）と食べるらしい。

中を覗くとすでにママは来ているようで、キュウベえにプチトマトを食べさせている。

「あなたこそここで何してるの…図書室なんて、アナタのイメージから180 かけ離れているんだけど？」

「お、俺も本ぐらい読むぜ！！『北の拳』とか『ドラもん』とか！！」

「漫画ばかりじゃない…：…ところでお昼、それだけなの？」

「ん？あ…ああ…。」

ほむらに言われて、弦太郎はハハハと苦笑して袋を見せた。

中にはアンパンと焼きそばパンとソーセイジパンが各一個ずつ…どう考えても、成長期真っ只中の男子高校生である弦太郎には少なすぎる。

先ほどまで元気だった弦太郎の表情がだんだんと沈んでいき…：…最後にはうなだれてしまった。

「こんなのでよければあげるわ。」

「へ…：…？」

そう言っただけなのに、ほむらが差し出してきたのは、なんと特製エビフライ弁当。

何でも杏子が一回食べてみたいとか言うので、代わりに買って来たんだそうだ。

幸い彼女が行った時はまだ誰もおらず、難なくGET。

「い、いいのか…？これ佐倉のなんだろう？」

「あの子はどうせ私やママさんのまで食べるからいいよ。それだけじゃ足りないでしょ？」

「あ…：… 曉美…：…！！お前良い奴だな…：…！！」

「いるの？いらなの？」

「いりますいります！！下さい！！」

JKも美味いと絶賛したエビフライ弁当、GET。

少し冷めてしまっているが、問題無く美味しく食べれるだろう。

ほむらの手を取り、弦太郎は彼女に大感謝。

「ありがとよ〜ありがとよ〜！！」

「や、やめなさい！友達でも無いんだから……、」

「だったら今から俺とお前は友達だ！！」

「……………」

弦太郎がそう言い放つと、ほむらは冷たく彼の手を振りほどき、図書室の扉に手を掛けた。

そして背中越しに、彼に言う。

「友達は…………作らない…………！！」

それだけ言い残し、ほむらは図書室の中へ。

『あつ』という声を上げて弦太郎が彼女を追いかけてよつとするが、彼女の言った言葉に少し違和感を感じ…………追いかけるのをやめて部屋へと向かった。

ラビットハッチ

「うーす。」

「あ、遅いよ弦ちゃん！」

「皆お前を待つて食事に手を付けてないんだ、全く……昼食なんて学校来る前から用意しとけ。」

「わりいわりい。んじゃ、早速食おうぜ！」

仮面ライダー部で彼を出迎えてくれたのは、クラスメイトの賢吾とユウキ……それと先輩である美羽と大文字、後輩のJKと友子だ。

全員で弁当を広げては、朝の授業について話したり、普通に高校生らしい話をしたり……。

最近では賢吾も仮面ライダー部の皆とかなり打ち解け、彼は隣に座っているJKと一緒に楽しそうにしゃべっている。

そんな中で……これだけのメンバーを変えるきっかけとなった男、弦太郎だけは弁当を食べる箸が進まずに会話に参加していなかった。それに気づいた友子と大文字が弦太郎を心配し、彼に呼びかける。

「どうしたの弦太郎さん……？」

「どこか具合でも悪いのか？ここ数日ゾディアーツが出現していないから……今までの疲れが出たんじゃないのか？」

「あ、いや……別にどこもわるかねえんだけど……ちょっと考え事が……。」

「ええ！？弦ちゃん考え事とするの！？」

「賢吾君、保健室の医療体制はどんな感じなの？」

「弦太郎さん体大丈夫ですか！？どっかの大きい病院で診てもらった方がいんじゃないっすか！？」

「おい……さすがに皆、如月に失礼だろ……。」

全員が本気で心配してくれている……喜んでいいか正直微妙なところだが……。

とりあえず賢吾により全員が反省し、代表して賢吾が弦太郎に聞く事に。

すると弦太郎は『曉美の事なんだけど……』と切りだし、この間の事を話し始めた。

勿論『魔法少女』や『魔獣』の事は話さず、あくまでさわりだけ。

「それでアイツ……さっき俺に言ったんだ……。『友達なんか作らない』って。」

「それは暁美が友達が欲しくない……という事じゃ無いのか？お前のその性格は、場合によっては人を大きく癩癩させるからな。……

まあ、かくいう俺も最初はその1人だったが……。」

「いやなんかな……どっか引つかかるんだよなこの言葉……何だ……？」

ほむらの言葉のどこかにバリを感じる弦太郎。

同じ様に、賢吾も彼から聞いたほむらのセリフに違和感を感じていた。

どういう事なのか……それを確かめるのはもう一度彼女に会って話す必要がある。

彼女が友達を作らない理由………それを知りたい。

「なあ賢吾……俺放課後……。」

「暁美のところだろ？言われなくてもだいたいわかって来たよ……

君のその単純な頭はな。」

「言ってくれるぜ！」

2人はお互いにフツと笑うと、昼食を食べ終え、全員でそれぞれの教室へと帰って行った。

第3話 友達は作らない

第3話 友達を作らない(後書き)

弦太郎去った後の魔法少女達

ほむら「お待たせ。」

マミ「ほむらさん、お疲れ様。ごめんなさい、もう先に食べ始めちゃったわ。」

キュウベえ『このプチトマト、中々甘くて僕の中のエントローピーがリミットブレイクしそうだよ。』

ほむら「そりゃ良かったわね。」

杏子「おーい！悪い遅れたー！」

マミ「杏子さんお疲れ様。」

杏子「おっすマミ！お、ほむらほむら、弁当は？」

ほむら「買えなかったわ。」

杏子「ええー！？マジかよあたし今日の昼メシどうすんだー！？」

マミ「私のお弁当半分食べる？」

ほむら「まあ……買えなかった私にも非はあるし、私のも少しならあげるわ。」

杏子「お……お前ら……(涙)」

ちなみにほむらは弁当代を杏子に返しませんでした、理由？エゴだよエゴ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9840x/>

フォーゼマガカ

2011年11月29日02時45分発行